

世界は保たれているのである

Ⅱ ペテロ 3 : 1～13

友人が大病を患いました。手術にあたり、過去の資料整理をしようということでそれまで貯めてきた様々の新聞、雑誌などの切り抜き記事、約 30 年分を処分しました。それをしながら、彼が気づいたことがあったそうです。この 20-30 年、新聞記事の論評はほとんど変わらないそうです。いつでもかならずあるニュースは、いじめ問題、自殺問題、経済不況、テロ、等々。しかもその都度いろいろな提言が有識者から出されながら、ほとんど実行されずに今にいたるといふ有様です。なぜこのようになってしまうのでしょうか。

これはよいと思うことがあっても変えられないのは、なぜでしょうか。それはかならず反対する人が出てくるからです。反対する理由は何でしょうか。その人が損をする。それが理由です。行政が介入しようしてもなかなかできません。もちろん現場の人々はがんばって少しずつ変えようとします。しかし、なかなかことは進まないのです。

もちろんそれは直接的には罪の問題です。罪があるから、自分に利益を誘導しようとするのです。

しかし、その話を聞きながら、わたしはほかの見方があると思いました。それはこの 30 年間、全くよくなっていないのに、逆によくも崩壊せずに国が成り立っているな、ということです。私たちはいつの間にか、問題とは解決するもの、世界はどんどん良くなっていくものという錯覚に陥ってしまっているのではないのでしょうか。物理の法則によれば、エントロピーは増大するのであって、高次元のエネルギーは低次元のものへと変容し、複雑な構造物も時と共に古びていく、生物も生まれたときから、年を取り、やがて地上の生を終えるのです。進化論はこれに反し、物事はどんどん複雑に、そしてよくなっていくという誤解をわたしたちの理性に植え付けたのです。

聖書は私たちに考える枠組みを提供しています。それは「世界は良くならない。崩壊に向かっている」という考えです。終末思想ですね。今の世界はとっくに崩壊して不思議ではない。でも何とか踏みとどまっているのです。2 年前、ギリシャは財政破綻しました。しかし、なぜか人々は生きています。不思議です。それは貯金はそんなにできないかもしれない。犯罪は増えたかもしれない。大変な仕事に身をやつす人も増えたかもしれない。しかし、国としてなりたち、なおかつヨーロッパ諸国の中では唯一、難民の居住と一定条件のもとでの就業を許しているのです。日本も同じことをやれとは言いません。ギリシャには歴史のもとづく鷹揚さと、外部からの住民を処遇するノウハウが蓄積されているからです。これは国としての賜物です。またこの終末思想は、恵みに転換できるものでもあります。とっくに滅びていてもいいものが維持され、回っている。この不思議さは主の恵みと言ってもいいのではないのでしょうか。

このような困難、不思議な状態でペテロはわたしたちに聖書の教えを思い出ささい、と勧めました。聖書は私たちに主の救いを土台にして、主の愛を思い出ささいと言います。思い出すと何が起きるか、わくわくするのです。そしてこの主の愛と喜びがただ私たちの内側だけではなく、この社会の安定を保っているというのです。たとえば、経済が破綻し

ます。誰にも助けてもらえない。しかし、そこに愛の助け合いが発生するのです。これは NPO の活動が、財源の足りない地方ほど活発、かつ独創的ということからも見て取れます。主は私たちにそのような能力を与えてくださっているのです。

なぜそんなことが可能なのでしょうか。答えは一つです。私たちのうちにこの世界の物理法則に従わないものが厳然と存在しているからです。決して古びないもの、すなわち私たちの霊です。この霊は目に見えません。しかし、いつも新しく若く、行き来と私たちを導くのです。体と魂は衰えます。しかし、この霊だけは決して衰えを見せず、さらに鋭く、深く、私たちのうちで働きます。これこそ永遠のいのち、人間の希望なのです。

最初に戻りましょう。なぜ世界は良くなると錯覚するのか、それはエデンの園の時代、人が持っていた永遠性を覚えていることと、新しい天、新しい地を待ち望む霊の働きがあるからなのです。ただし、それを人の力で実現することはできません。いやむしろ、自分の内側にすでにある新しい創造を信じることから始まるのです。Ⅱコリント 5 : 13

この約束はキリストからのものであり、これこそ、主の私たちへの愛の約束なのです。聖書を読みましょう。